

第8章 河道特性

8-1 河道特性

安倍川は、静岡県と山梨県の県境大谷嶺(標高 2,000m)を源として南に向かって流れ、駿河湾に注ぐ流域面積 567km²、幹川流路延長 51km の一級河川である。

安倍川は、静岡市域を北から南にほぼ直線的に流れ、その流路延長は短く、かつ大谷嶺等の 2,000m 級の高山から一気に駿河湾に注いでいるために、河床勾配は中流部で約 1/150、河口付近で約 1/250 という急勾配を呈しており、我が国屈指の急流河川である。

安倍川上流部は、大谷崩を始めとする多くの崩壊地を抱えており、牛妻 (17.0k) より下流に至って谷底平野が出現し始め、さらに下流で扇状地の静岡平野が開け、この扇状地の上に静岡市街地が形成されている。牛妻より下流は砂礫の堆積が非常に多く、流路が固定されない網状河川であり、河口部には砂州が発達し広い静水域が形成されている。



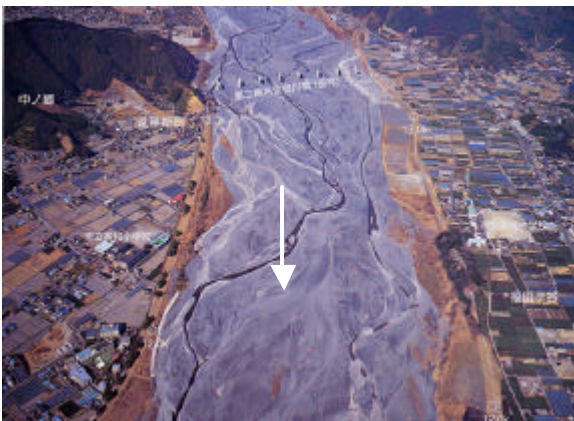
安倍川上流部 (大谷崩)

宝永 4 年 (1707 年) の大地震により崩壊したもので、崩壊土砂量は 1 億 2000 万 m³ といわれている。現在も年間 2 ~ 3 万 m³ 程度の土砂が流出しているものと想定される。



安倍川中流部 (21k ~ 22k 付近)

中流部から谷底平野が出現しはじめる。



安倍川下流部 (12k ~ 14k 付近)

下流部は扇状地性の静岡平野が開け、静岡市街地が形成されている。河道は網状流路となっている。



安倍川河口部

河口部は発達した砂州により広い汽水の静水域が形成されている。

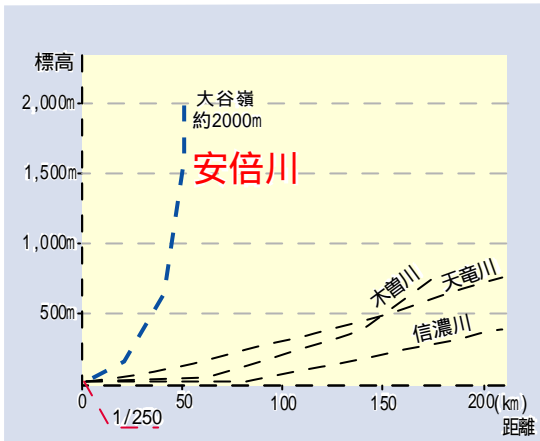


図 - 8.1 安倍川縦断形状比較図

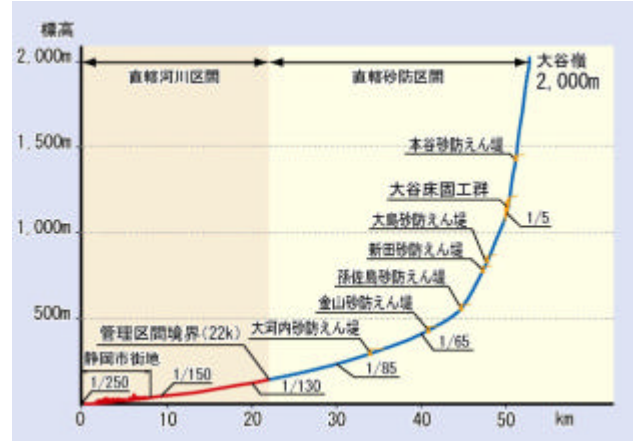


図 - 8.2 安倍川縦断図

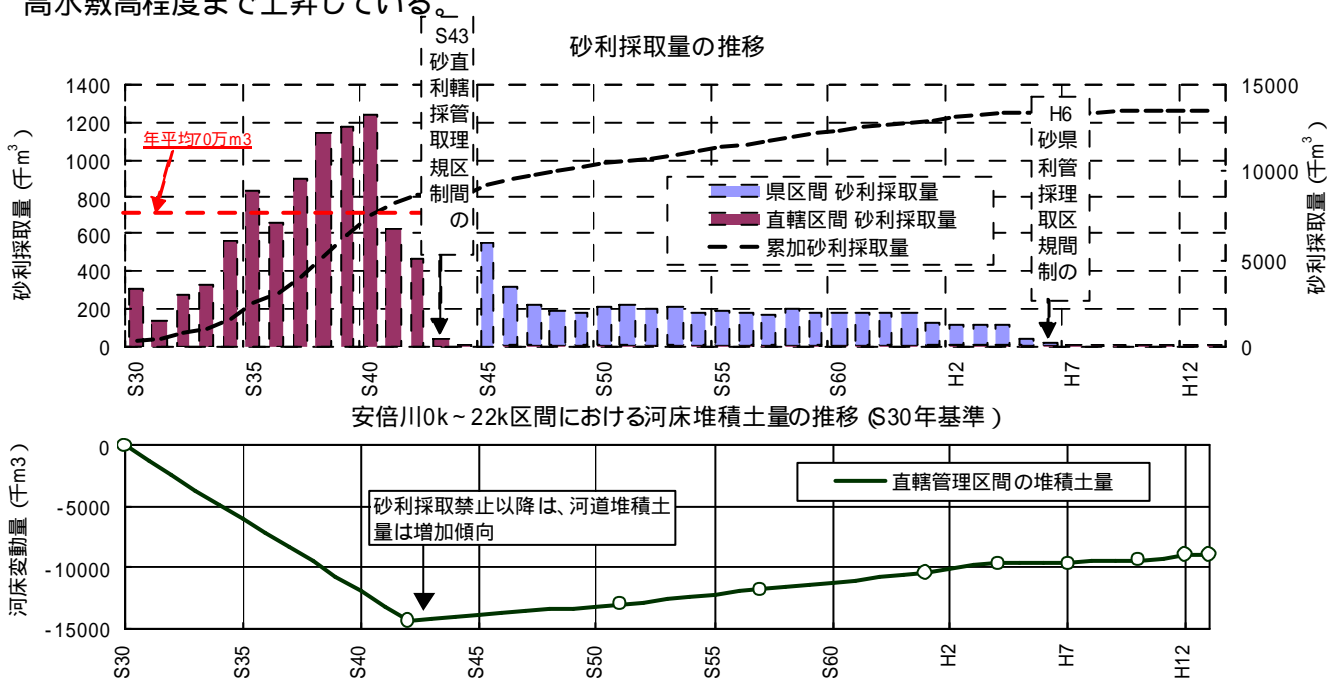
8-2 河床の経年変化

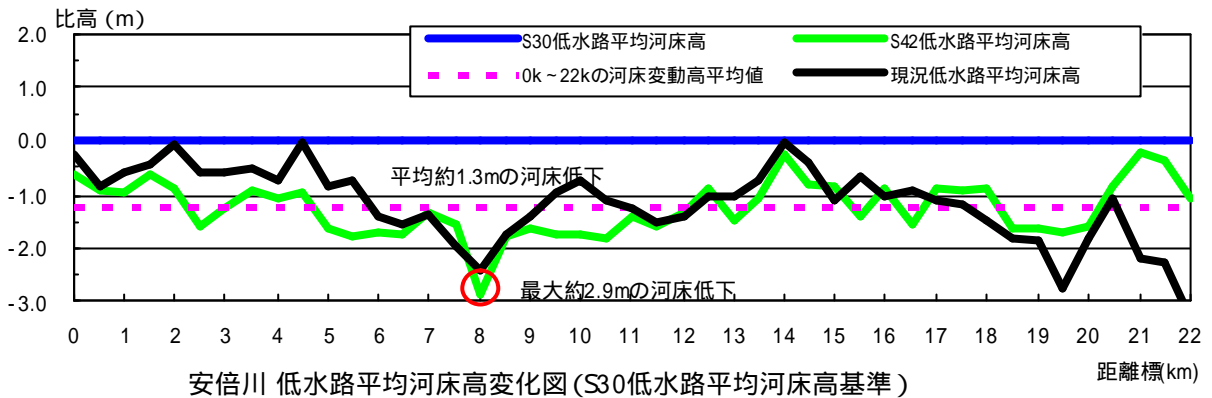
安倍川では明治時代から砂利採取が行われ、昭和 20 年代には大規模な機械が導入され、昭和 30 年代に入ると高度経済成長および東京オリンピックの開催に伴う建設ブームの影響により、砂利採取量は増加していった。

昭和 30 年代の高度経済成長期には、年間平均約 70 万 m^3 に及ぶ砂利採取が行われたことにより直轄管理区間の河床が最大約 2.9m、平均約 1.3m 低下した。その結果、橋梁、護岸など構造物の被災が発生した。

このため、昭和 43 年度以降は直轄管理区間で砂利採取が規制され、平成 6 年度以降は県管理区間において砂利採取が規制された。

昭和 43 年度以降は、直轄管理区間の河床は上昇傾向へと転じ、最近では低水路の河床高が高水敷高程度まで上昇している。



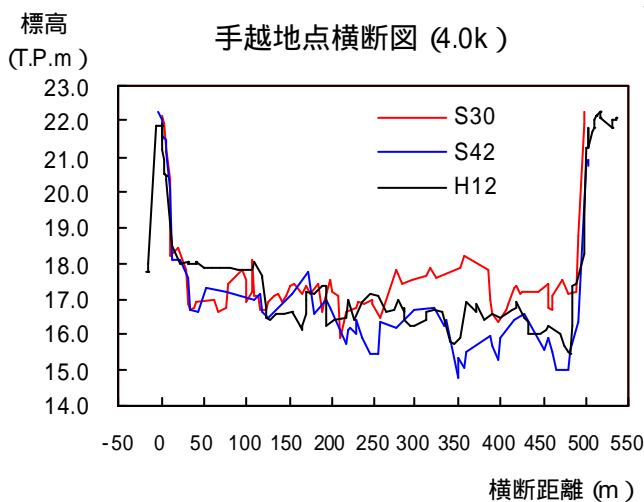


竜西橋陥没 (安倍川 19.5k 付近)

平成 13 年 8 月洪水、平成 14 年 7 洪水では、昭和 10 年に建設された竜西橋が陥没した。



安倍川橋陥没の新聞記事
 (昭和 44 年 6 月 27 日静岡新聞：静岡新聞社編集局資料調査本部調査部許諾済)



近年の河床上昇状況
 (安倍川 7.25k 付近左岸)